夢追い人

たくさんの人が訪れる職人の街・大川にしたい

今回の夢追い人は桐里工房の稗田さんにお話を伺いました。

人体に優しい木材での家具作り

桐里（きり）工房
代表 稗田 正弘 さん
（平成26年度認定 大川の匠）

桐箪笥

桐里工房の歴史は古く、創業は明治45年（大正元年）とのことです。

「先々代から三代に渡って技術の継承を行いながら現在に至っております。大川家具（榎津指物）にとって、前の戦争の敗戦は、大川の大きな分岐点になりました。終戦後の大川には、復興のための需要が高まり異常な特需景気が訪れる事になります。このような時代に大川に求められたのは『早く作ること、安く作ること、沢山作ること』でした。ところが、先代（二代目 武夫）は、大川の伝統的な家具造りの技法を頑固に守り続けて、機械よりも道具を大切にしてきました」

木工の原点を守ってきたともお話された稗田さん。三代に渡って受け継がれた技術は大切に残しながらも、新しい物創りへの挑戦をする事で、画期的な新商品が生まれてきたそうです。

「先々代の頃の大正時代には錺（かざり）金具を打った榎津箪笥が主流でしたが、先代からは金具の少ないシンプルな桐箪笥にデザインも進化して、全く新しい面取り技法も開発してきました。そして私の代になってからは、二人の技術の積み重ねを踏襲した上で、さらに深く研究を行い、技術とデザインの革新を行ってきました。三代に渡って重ねられた技術という強みがあって、さらに創意工夫を行うことで桐里工房の独特の魅力がアップすると考えています」

桐家具など様々な製品を作る際、桐には色んな能力があるともお話されました。

「桐箪笥とは、着物を守るための道具です。完全に自然乾燥した桐の木には、数々の不思議な超能力が秘められています。まずは、桐の木は板材になっても呼吸をしているということです。そして空気を循環させる調湿機能があり、収納に適した空間を自然に作り出し、カビが生える事も無く、防虫能力が強いのが特徴

工場にて作業中の稗田さん

です。また、桐の木は遠赤外線が竹炭より高く、収納物の風化作用を遅らせることが出来ます。断熱効果も高く、一定の温度と乾燥状態を保つ事ができ、引き出しの中は科学的にコントロールされたような空間を作り出します。それから、昔から伝説のように伝えられている火災になっても桐箪笥は燃えないということです。その事実を先代から聞いており、私の代になっても数回火災にあった桐箪笥を見てきましたが、確かに中の着物は無事だったことがありました。そのためには、化学塗料で仕上げたものではなく、天然のヤシャブシの煮汁と山の砥の粉で仕上げた昔からの塗装でなければいけません」

桐の良さを十分体感した上で、もっと人と触れ合う事の出来る桐家具を作りたいと思ったと話された稗田さん。科学的な面からも桐の研究をされたとのこと。

「桐の下駄などは素足のまま使われていることや、桐枕・桐板等リラックス効果があると昔から伝えられていることへの疑問から研究がスタートしました。国の補助を受け、工業試験場の協力を得ながら、いくつもの桐の研究を重ねてきました。その結果、桐には素晴らしい特性があると確信しました。遠赤外線はもとより、保温保湿（調湿）・電磁波遮断効果等々、人体に優しい素材だということが判明されました。先々代から桐を使った製品を作ってきましたが、私の代からは多くの人に桐に触れて、その感覚を味わってもらいたいといった考えに変わってきました。もちろん、伝統的な桐箪笥はそのままに残しながらも、新しい桐家具のデザインと桐の活用方法を考えてきました」

桐を使った健康的な総桐ベッドや桐の椅子、そして総桐の癒しの空間等を開発されたそうです。

「桐の一枚板は、手触りも合板とは違い、温かみのある木材です。化学物質をほとんど含んでいませんし、人に優しいためにアレルギー等の発症の心配もありません。研究の結果、桐は人体の触れる部分に使うのが一番良いという判断をして、【桐の上で眠る】をコンセプトに、健康的で軽い羊毛入りの総桐のベッド※を開発しました。他の木材を使用したベッドよりも体が温まりやすいので、深い睡眠と疲労回復に繋がります。また普通の木の椅子は、長く座るとお尻が痛くなりますが、桐の椅子は痛くなりません。羊毛入りで軽く、使い勝手が良いのが特徴です。さらに、『瞑想詩人』という茶室の様な小部屋※も製作しました。いまは赤ちゃんの為の総桐箪笥のデザインを考えていますね」

職人の街・大川に

家具に関する様々なお話をして頂くなかで、これからの大川は、観光木工の街へと変わっていくべきではないだろうかともお話されました。

「現代の大川は、榎津指物の流れを受け継ぐ伝統工芸家具作りを行う工房と、産業家具工業品の工場との二つの顔が存在しています。この両方が大川の観光の資源になると私は考えています。大川が観光木工の街になるために、まず一番必要なのは、大川家具の歴史と榎津指物の起こりが見学出来る歴史資料館の側面をもった博物館や展示場だと思います。大川市では江戸時代から昭和初期かけて大川で制作された家具や昔の木工道具、当時の調度品を集めて保存してあります。しかしそれらを展示する場所がないのが現状です。昔の職人の技や価値が詰まった家具をそういった博物館、展示場で魅力的なディスプレイをしてもらえたらいいなと思います。またそこを観光の核とも考え、大川市を訪れた観光客の方をまずはその施設に案内します。昔の家具作りの道具やこれまでの大川家具の歴史や実際に大川で作られた桐箪笥など、そこへ行けば大川の全てを知ることが出来るという施設にしてほしいですね。また、現代の大川家具の常設展示場も併設できれば、お客様は直接各木工所へ繋がって行くのではないでしょうか。これからは家具工場が、木工所がインテリアショップになるという考え方も必要だと思っています」

観光木工の街だけではなく、大川を職人の街にしていくことも大事だとお話されました。

「お客様が工場（工房）の見学に来られた時に、機械を動かして作っているところをお客様に見せても、あまり感動されません。ところが、ハチマキをして、カンナやミノなどの木工道具を使っている姿を見せると、機械を動かしている姿とは違った感動が生まれます。昔の木工まつりでも各木工所の優秀な若手の職人達を選抜して屋外に作業台（ばんこ）を並べ、茶箪笥などの共通の課題を与え、所定の時間内に仕上げて、その技術力を競うという、家具製作技術の競技会が行われていました。そういった活気ある職人の街をもう一度取り戻せたらいいなと思いますね」

観光木工の街、職人の街へ繋がるひとつとして、美観地区（メインストリート）があれば、より良い街づくりに繋がるのではないかともお話された稗田さん。

「インテリアの街・大川、職人の街・大川をイメージした時に、大川の象徴的な通りが必要だと思いました。例えば、数百メートル程度でも良いので一定の区域を指定して、大川市の美観地区と呼ばれる魅力的な通りを作る。その通りでは、家具の制作作業を見学したり、実際に家具を購入したり、また通りの景観と合ったカフェやレストランで食事や休憩が出来る観光ストリート、職人の見える街大川を代表する道があればいいなと思いますね。

ふらっと大川を訪れた際、様々な大川の魅力に触れられる場所が必要だなと思います。職人の街・大川、観光木工の街・大川になるために、私も努力し続けたいですね」

※…実用新案取得済